

「ところでイレイナさん。こいで一つ提案ていあんがあるのだけれど、聞いてくれる？」

「……なんでしよう」

「実は最近、この国は少々治安が悪くなっていてね、うちの店も人員が微妙びみょうに足りないの。マクミリアが新しく働くようになってくれたけれど、もう一人くらい欲しいのよ」

「ほう」

「どう？ 一年間うちで働いてみない？ そうしたら、あなたが来年、国から出られるように保障してあげる。もちろん、それまでの生活も、不自由なく暮らせるように手を回すわ」

どうせ依頼解決料として一億レイン入るし——と滅茶めちや

苦茶くちや小声こごえで呟つぶやいたのを僕は聞き逃にがさなかつた。

さては懼かかつてもいない祈りを解といたことにして支配人から金を奪さらい去るつもりであるな？

……悪女だ。

「……つまり外に出たければ配下になれと」

「そりうらうらことね。どうう？」

「……………」

イレイナは考える素振りをしばし浮かべて、ぬるくなつたコーヒーを一口飲んだ。

そして。

勝負を降りたときのように、吹っ切れたように息をひとつ吐いて、応えた。

夜。

イレイナを近くの宿屋に連れて行ったあとの帰り道、僕は横を歩くりリエールのほうを向いた。

「……ねえ。でも、今回の件でちよつと腑ふに落ちないことがあるんだけれど」

「なあに？」

「どうしてあのタイミングで保安局の連中がカジノに来たのかな？」

すると思い出したように、彼女は「ああ」と手を叩く。

「私が通報したのよ。『魔女まじよがカジノで荒稼あらかせぎしててヤバ

い』って。もちろん、入国を禁じられている魔女が国にい

るといふ情報を持ち込まれて、保安局が黙っているはずもないわ。すぐに動いてくれた」

「……いつ通報したの」

「パフエたべたあと」

「……」

「あとで連絡をしておかないとね。『あれは見間違いでしたすみません』って」

「でも店内にいた連中が証言しょうげんするんじゃない」

「大丈夫。金を渡して沈黙ちんもくを勝ち取っておいたから」

「……」

さすが札束さつたばで顔をひっぱたくスタイル。

でも、つまりそれって。「ぜんぶリリエールの思惑おもわく通り

に動いていたってこと？」

保安局に踏み込まれたことで、イレイナは後がなくなつた。魔法を使えなくなり、あの時点で、既に^{すで}イレイナはリリエールに頼るしか道がなかった。

僕とリリエールによつて、魔力が空になるまでポーカーをさせられたおかげで。

「べつに思惑を巡^{めぐ}らせていたわけじゃないわ」
リリエールは闇に沈んだ空を見上げた。

どこか懐かし^{なつ}そうに。

「ただ、彼女を迎えたかったただけよ」

○